
リュックサックの君

遥風 覇鵠渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リュックサックの君

【Nコード】

N8621E

【作者名】

遥風 覇鵠渡

【あらすじ】

早朝、出かけようとする冬子に母・和美はある事を思い出し、不思議な話しをし始めるのだが……。

「お母さん、それじゃあ行ってくんね」

冬子^{ふゆこ}は狭い玄関で靴紐を結びながら、母に声を掛けた。短くカットし髪にふにゃふにゃとした布の帽子を被り、ギンガムチェックのワイシャツにジーンズという……何とも色気のない格好である。

いったいこの娘はどこに行くつもりなのか。そう聞きたくなるようなリュックを背負う冬子に、寝惚け眼の母・和美が目元を擦りながら、私に娘なんていたかしら？

……なんてとぼけたことを考える。

あたしったら、酷いわね。

心の中で冬子に謝りつつ、欠伸のついでに口を開いた。

「まだ四時じゃない……五時に出れば十分間に合うでしょうに」

欠伸混じりな和美の言葉を聞いて、冬子は

「これだから、母さんは」と小馬鹿にしたように首をふった。

「冬子ったら、せっかちなんだから」

和美は深く溜め息をついた。一泊二日の独り旅だかなんだか知らないが、夏休みなんだからゆっくり行けばいいのに……と彼女は思う

のだ。だがキビキビと靴を履ききった冬子は、新幹線の時刻までまだ三時間はあるというのに、さっさと立ち上がって出かけようとしている。

「ま、気をつけて……」

……行くのよ、と続けようとした和美は、ふと奇妙な感覚に捕らわれた。こんな格好をした誰かを……知っている気がする……。冬子じゃなくて、冬子に似た誰か。あれは確か……。

ドアノブに手を掛けた冬子を、和美が引き留める。

「ねえ、ちょっと今思い出したことがあるんだけど」

「何？」

面倒そうに振り返った冬子に、和美はガウンの襟を合わせる様な仕草をして、眩しそうに目を細める。

「少し昔話に付き合ってくれる？」

茶目っ気たつぷりに手を合わせる和美。冬子は渋い顔をして、「急いでるから」と素っ気ない。けれど、和美はへこたれない。

「いいじゃない？ どうせ時間はあるんだし」

お人好し気味の冬子は、仕方なく腰を下ろすのだった。

.....

冬子のリュックサックを見たら思い出したんだけどね、お母さん……不思議な若者に何度か助けられたことがあるのよ。その若者もね、冬子みたいなリュックサックを背負っていて……小さな頃から、お母さんがピンチの時は必ず助けてくれた。

顔はよく思い出せないんだけど、全然年をとっていなかったっていうのは覚えてる。いつ現れても若いまま。お母さんの初恋はその人だった。

最初に現れたのは、十歳の頃。長野にある叔母さんの家に、泊まりがけで遊びに行っていた時のことだった。叔母さんの家は民宿をやっているね、お母さん達一家の他にも沢山のお客さんが泊まっていたんだけど……その一人に、その人が居たの。

長野っていうと、雪深くて有名……よね？ 叔母さんの家は山の中にあつたから、雪の積もり方が並みじゃなかった。東京育ちの私は、降り積もった雪を見て、大喜びではしゃぎ回ったものだわ。

まあ、それで本題。

私ったら、あんまりにも嬉しかったものだから……毎日山道を駆け回っていたのだけど……ある日、道を踏み外して、下に落っこっちゃったのね。雪の上に落ちたから、ケガはしなかったんだけど……五メートル近くも、積もった雪の中に埋もれてしまっていたから、帰り道がわからなくて、わんわん泣いちゃった。

そしたらね、ずんて、雪の壁を割って白い腕が伸びて来たの。一瞬幽霊かと思ったけれど、次に現れたのはにかって笑った背の高い若者だった。

「帰ろっか」

旅館で見かけた青年だったからね、私は更に泣いて、喜んだ。差し出された左手を握って長々長々歩いて……やっとな叔母さんの家にたどり着けた頃には、もうその若者はどこにも居なかった。あとで叔母さんに確かめてもね、そんな若い客は泊まってないって言われちゃったし……。

びしょびしょに汚れて帰って来たから、あの後お母さんに散々怒られたのよねえ。

ふっ、と息をつく和美を冬子が目で促す。

どうやら続きが気になるみたいね。

和美は焦らすように嘘の欠伸をしてから、再び話し出した。

次に現れたのは、それから二年も経った頃。私は小学六年生になっ
ていて、ちょっと小生意気なお年頃。

我が家の門限は五時だったんだけど、友達によっては九時まで大丈

夫な家もあった訳で……。今思うとほんと下らない事なんだけんどねえ……。うん、でも下らない事が結構大事だったりするじゃない？

とにかく、私は門限に不満があつて……。その日は、逆らつて九時迄遊んで歸つたの。

そうしたら……。――。

運悪く変質者に車でつけられちゃつて、危うく誘拐されるところだった。

そこへ現れたのが例の彼。変質者の頭を後ろから何かで叩いて、気絶させてくれたの。暗くて顔は良く見えなかったんだけど、声が同じだったからわかった。優しい言葉でも掛けてくれるのかと思つてたらね。

「門限は守りなさい！」

怒鳴られちゃった。だから、走って帰宅した。でもこの時、彼を好きになつたのよ……。何か運命みたいなものを感じて。

後日、変質者は逮捕されたけど、彼の正体はわからずじまい。ほんつとに悔しい、あの時逃げないで住所聞いとくんだった。

落胆した和美を見て、冬子が愉快そうに笑う。

「もう笑い事じゃないんだからね！」

若い娘さんの様に声を高くする和美。冬子は喉をくくっといわせながら、和美が先を話すのを待った。

さて、彼にはそれから度々出会った。いっぱいありすぎるから、もう最後に出会った時の話しをしちゃうね。時間も気になるだろうから。

彼の現れた最後は、私が二十一歳の時。当時の私は生きる気力が乏しくてね、就職活動の真っ最中だっているのに、将来なんて何も考えていなかった。

周りはどうどん面接に行ったりなんかしてね、私はなんとなくそれが滑稽に思えて……その一歩さえ踏み出せないでいた。

あの時も、いつもの様にぶらぶら出歩いた帰りだね？　ほろ酔い気分のサラリーマン集団に侮蔑の視線を送りながら、駅のホームに立っていたの。

そしたら、どんって誰かがぶつかって来た。自分の体が傾いていくのがはつきりわかった、何かを掴もうとしたけど両手は宙を掻くばかり……。

ああ死ぬのね。

じりじり迫ってくる電車に目をやりながら……音が消え失せたスロ―モーションの世界で、私は諦めて目を瞑^{つぶ}った。

けれど、どんなに待っても衝撃は襲ってこない。恐る恐る瞼を開くと、時間が止まっていた。……人々が大きく口を開いたまま動きを止めていて、電車もまだまだ向こうに止ま^{とど}まっていた。それに、空には張り付いたみたいに動かない鳥がいたから……そうとしか考えられなかった。

私は体を線路に傾けたまま、誰かに左手首を握られてた。誰かってのは言うまでもなく、あの若者のことなんだけど……。若者は……リュックサックの若者は、白い光を背にして、私に微笑んでいた。逆光で細かい表情は見て取れなかったけれど、引き結ばれた唇が優しく弧を描いていたのはなんとなくわかった。

「貴女に死なれると困るんです」

どういう意味？

そう問いたかったけど、ホームに引き戻されて時間が流れ始めた途端、彼の姿は霧の様に霞^{かす}んでいってしまった。私はどうしても、もう一度彼に会いたいって思ってたね？ 単純だけど、それが生きる活力になった。

必死に面接受けて、ちゃっかり受かって……。でもそれ以来どんなに辛い目にあっても、もう彼は二度と現れなかった。

仕方ないから初恋は諦めて。目出度^{めでた}く明日、壮一さんと結婚式つ……。……って？

.....

語り終えた和美は、青ざめて冬子を凝視した。

そうだ、私は明日結婚する。子供を産んだおぼえなどある筈もない。後退る和美に、冬子は穏やかな笑みを浮かべた。何も持っていないかった左手に、真っ赤なカーネションを握っている。

「あ、あんた誰！」

冬子が虚勢をはる。だが、冬子はふわっと腰をあげてカーネションを床に置くだけで動じる様子は全くない。

「私は女なんですよ。では八ヶ月後に」

そう言うのと、和美の腹を指さし満足げに笑って出て行った。

「何よ……」

一人早朝の玄関に残された和美は、さっきの妙な感覚を思い出していた。

あれは既視感というものに違いない……ということとは。

ああ、まさか。あの人は……あの人がリュックサックの若者ではなかったか。

朧気な記憶を辿ってみても、やっぱり顔を思い出すことはできない。それはさつき見たばかりである、冬子も然り……。それが何よりの証の様な気がする。

和美はカーネションを拾うと、ふうつと息を吐いた。目頭が熱を帯びてきて、涙の粒が睫毛から零れた。

「カーネション……」

不思議な不思議な初恋の若者。もうすぐ彼女に会えるのかと思うと、悲しいやら嬉しいやらで……。和美は暫く顔をあげることが出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8621e/>

リュックサックの君

2011年1月26日15時37分発行